

エリザベス・ジェニングスの詩二編： その中に歌われる「私」をめぐって

木村 淳子

詩を通時的に、つまりシェイクスピアやジョン・ダンのあたりから18世紀の古典派、19世紀のロマン派、そして現代へと読みついでいくときに気づくのは、「私」の発展と変遷である。神の大きな機械時計のひとつの部品として働いているかに見える古典的な自我は、それ以上にもそれ以下にも発展も縮小もしない。ジョン・ダンのあの有名なラヴ・ソング、“VALEDICTION : FORBIDDING MOURNING”では、「私」は別れにあたって恋人に理路整然と嘆きは無用と説得する。「私」ときみはコンパスのふたつの足のように、別々のふたつと見えながら、もとは一つに繋がっていて、やがては一つになるのだ、という、例のコンパス・イメージであるが、ここでは「私」ときみは融合しあって一つになるのではない。「私」はしっかりと「私」の分を守り、きみはきみの領分を守るだけなのである。このような「私」は何もダンに限ったことではないし、また恋愛詩にかぎったことでもない。イギリスのルネッサンス期の詩に歌われる「私」のかたちは、多少なりともこのような限定的な「私」である。

やがてロマン派の時代に入ってくると、「私」に変化が見えてくる。「私」は、外界からも自己からも解放されるように、あるいは外界と一つになり自己の外へと拡大、拡散していくように見える。虹に心を奪われ、花と一つになって踊り、風に乗って大空を駆けめぐろうとする、また、そのような願望に心を労する自己、すなわち、ワーズワスやシェリーの詩

のなかに見られる「私」である。さらにもっと超越的な「私」はエマソンやホイットマンなどの、またエミリー・デイッキンソンのようなアメリカのロマン主義の詩人達の詩に見られる。エマソンが初めて手にして驚嘆したホイットマンの「私自身の歌」の詩行，“I celebrate myself,/ And what I shall assume you shall assume, / For every atom belonging to me as good belongs to you.//I loaf and invite my soul,/I lean and loaf at my ease ……observing a spear of summer grass.”の中の「私」は、何物にも勝って自由な無限定な、見ようによっては素朴な「私」である。

「私」をどのように捉えるかは、すなわち世界をどのように見做し考えるかにかかってくる。19世紀末の人々の嘆きは、“Dover Beach”のマッシュウ・アーノルドの嘆きと一つになるだろう。“Ah, love, let us be true / To one another! for the world, which seems / To lie before us like a land of dreams, / So various, so new, / Hath really neither joy, nor love, nor light, / Nor certitude, nor peace, nor help for pain;”

「私」の前に広がる世界は無限定な自己の存在をもはや許すことのできない世界である。つまり世界そのものが限定され、卑小化されてしまっているのだから、「私」はその翼を広げることができない。世紀末のいわば虚無的な傾向は、20世紀に入るとロマンチズムをますます排除するような傾向に動いていくように見える。T. E. ヒュームが現れ、イマジスト達が現れ、T. S. エリオットがその巨人的姿を現す。その後続く世界の状況を暗示していたといってもよいだろう。

さて、20世紀末の現代詩の状況を論じることは私の手に余ることであり、またその意図もいまは持たないが、混沌たる現代の状況を示唆するように、詩の世界にもまた、さまざまな主張や方法、形式がひしめいていることだけは確かなことである。そしてその中に、ロマン主義的と見

えるような「私」を歌う詩人も、見られる。もっとも詩は文学の他のジャンルの作品にも勝って、自己告白的ではあるし、1960年代を中心に「私」にとくに強い関心を寄せた告白詩人と呼ばれる詩人群も現れた。アン・セクストンやシルヴィア・プラス等の女性詩人達の作品はおおいに持てはやされた。これらの詩人達の詩は、窮屈な現状における自己の状況を歌うものだった。そしてこれらの詩人達を、ポスト・ロマンの詩人達などと呼ぶこともあった。私がここでロマン主義的な傾向の「私」と言うのは告白詩人達の歌うような、抜き差しならぬ状況に捉えられた「私」ではなくて、もっと大らかな広がりを持った自己の表現である「私」である。エリザベス・ジェニングスはそのような、広がりのある「私」を歌う詩人の一人である。

1987年にエリザベス・ジェニングスは *COLLECTED POEMS* によって、WHSMITH Literary Award を受賞した。私の持っているペーパーボックスのこの詩集⁽¹⁾の裏表紙には、ピーター・リーヴァイのつぎのような評言が載っている。“She conveys a sense of something hidden but powerfully alive in her; she may be the last poet of what used to be called the soul.”

ペンギン・ブック版のケネス・アロット編集によるアンソロジー *ENGLISH POETRY 1918-60* の紹介文のなかにアロットは彼女自身の言葉を次のように引用している。“Prose has always seemed to me an attempt to find words for something which I already know, whereas my best poems manage to say in a strict inevitable form something that I did not know before.”⁽²⁾すなわち、書くことは、誰にとってもそうであるが、とくに彼女にとっては認識行為である。いみじくも *A WAY OF LOOKING* と題された1955年に発表された詩集のなかから二つの詩を紹介しようと思う。これは前記アンソロジーに収められている二編でもある。

Song at the Beginning of Autumn

Now watch this autumn that arrives
In smells. All looks like summer still ;
Colours are quite unchanged, the air
On green and white serenely thrives.
Heavy the trees with growth and full
The fields. Flowers flourish everywhere.

Proust who collected time within
A child's cake would understand
The ambiguity of this –
Summer still raging while a thin
Column of smoke stirs from the land
Proving that autumn gropes for us.

But every season is kind
Of rich nostalgia. We give names –
Autumn and summer, winter, spring –
As though to unfasten from the mind
Our moods and give them outward forms.
We want the certain, solid thing.

But I am carried back against
My will into a childhood where
Autumn is bonfires, marbles, smoke ;
I lean against my window fenced

From evocations in the air.

When I said autumn, autumn broke.

初秋の歌

匂いのうちにやってくる秋。

あたりはまだ夏の姿；

色彩に変化は見られず，大気は晴れやかに

緑に白に輝いている。

木々は逞しく，畑は豊かだ。

花々は至る所に咲き乱れている。

子供の菓子に時を求めた

プルーストにはこの曖昧さが

分かるだろうー

夏はまだ盛りだが

立ちのぼる一筋の煙は

手探りしながらやってくる秋のしるし。

すべての季節は郷愁にみちている。

私達は名前を付けるー

秋，夏と，冬，春とー

あたかも心の中から気分を解きほぐし

それらに形を与えるかのように。

私たちが求めるのは，堅い確かなもの。

だが私は意に反して子供時代に
ひき戻されてしまう、秋が
焚火で、おはじきで、煙であるあの頃に；
思いを引き出すものから私を隔てている窓に
私はもたれる。
秋、と私がいったとき秋がうまれた。

私達は絶えず確実なもの、手にとって確かめることのできるようなものを求めている。また、目に見えるものすべては確実なものであるような気がしている。本当だろうか、とジェニングスは考える。詩人にとって、世界は彼女の外側にあるのではなく、彼女の内側にあるものなのだ。内側にあるものが外界にあるものに触発されるとき、目に見える表面的な世界が何であれ、そこに新しい世界が生まれてくる。辺りは夏の盛り、目に見えて秋の景色はない、が、立ち昇る一筋の煙に彼女は、秋、を感じとる。そこに私は、馬追いのひげのそよろにくる秋を感じとる繊細な日本の詩人の感性に似たものを見るように思うが、ジェニングスの「私」にはもっとはっきりとした積極性がある。世界は「私」を軸にして展開していく。秋が生まれるのは、「私」が秋、といったときなのだ。

同じ詩集の中の“*In the Night*”と題された詩もジェニングスの特長を示していて興味深い。

In the Night

Out of my window late at night I gape
And see the stars but do not watch them really,
And hear the trains but do not listen clearly ;
Inside my mind I turn about to keep

Myself awake, yet am not there entirely.
Something of me is out in the dark landscape.

How much am I then what I think, how much what I feel?
How much the eye that seems to keep stars straight?
Do I control what I can contemplate
Or is it my vision that's amenable?
I turn in my mind, my mind is a room whose wall
I can see the top of but never completely scale.

All that I love is, like the night, outside,
Good to be gazed at, looking as if it could
With a simple gesture be brought inside my head
Or in my heart, but my thought about it divide
Me from my object. Now deep in my bed
I turn and the world turns on the other side.

夜に

夜遅く私は空を仰ぐ
そして星を見るのだが本当に見ているのではない、
汽車の音を聞くのだがはっきりと聞いているのでもない；
心の中のどこかで私は寝返りを打つ
目覚めていようとして、だが私はそこに居るのでもない。
私の一部は暗い風景のなかにでている。

私の考えのどれだけが私なのだろう、私の感じるどれだけが？

まっすぐに星を仰いでいる目のどれだけが？
思いをコントロールすることが私にできるだろうか
それとも思いのままにできるのは私の幻想だけか？
心のなかで私は向きをかえる，心は部屋，
その天井を見ることはできるが完全に測ることはできない。

私の好むものはみな，夜のように，私の外側にある，
じっと見ていていいもの，ちょっとした仕草で頭のなかに，
心のなかに取り入れることができそうなもの。
だがそれについて考えるとき私はそれから
分たれてしまう。ベッドの中で寝返りを打つ
と，反対側で世界も寝返りを打つ。

ジェニングスにとっては，世界はたしかに「私」の中にある。同時に，詩人は身の回りの物についての一種の不確かさをも感じている。夜遅く窓にもたれて仰ぐ星，遠くに聞こえる汽車の音，いままさに寝入ろうとするときにおぼろな眼で見回す部屋，それらを「私」は確実に見，聞いているのだろうか。いま「私」の見ている（と思われる）部屋が現実の部屋なのか，それともそれは「私」の心の中のことなのか，またそれらは厳然と「私」の外側に存在するものなのであろうか。このように考えながらも，詩人は不安を感じてはいない。「私」は外側の世界に包含されながら，世界を取り込む。そして，「私」の見る，あるいは，作り上げる世界を真実と感じながら，これも一つの見方（A Way of Looking）と考える。ジェニングスの「私」と外界の関係は，テレビの画面上でそれぞれ別の二つの映像がオーバーラップしながらフェイドイン，フェイドアウトする，そのような関係にたとえる事ができる。

自己の投影としての外界，外界の影響下にある自己，という世界認識

は、ロマンチックなものに見えるが、最近ではソシユールをはじめとする言語学者達が、認識行為としての言語活動の研究から、言葉と言葉の措定する対象についての興味深い関係を示してくれている。最近読んだイヴ・ボンヌフォワ氏の“French Poetry and the Principle of Identity”⁽³⁾と題されたエッセイのなかに興味深い記述があった。ボンヌフォワ氏は「馬」という言葉を引き合いに出す。「馬」と人が言うとき、その言葉が喚起するのは、現実の馬その物ではなくて、一つ概念なのだ。そして日常の言葉としては、それだけで充分役に立つ。しかし詩の言葉はそのような道具としての言葉ではない。“Perhaps, it is a madness in the language, which we can understand only through its eyes of madness... only through poetry’s way of understanding and taking hold of words.”⁽⁴⁾とボンヌフォワ氏は述べる。そしてさらに別の例をあげる。

“This, I believe, is what initiates poetry. If I say “fire” (yes, I am changing examples and that already in itself means something), poetically what this word evokes for me is not only fire in its nature as fire ... what there is about fire that suggests its concept ... but the presence of fire in the horizon of my life, and certainly not as an object, analyzable and usable (and, therefore, finite, replaceable), but as a god, active and endowed with powers.”⁽⁵⁾

例えば「火」という言葉が発せられるときにそれが詩人の心に喚起するのは、すなわち分析不可能な、私自身の生命と一つになった存在そのものとしての「火」なのである、とボンヌフォワ氏は言う。「初秋の歌」のなかでジェニングスが、“秋、と私がいったとき秋が生まれた。”と歌う秋は「私」と不可分の「私」の存在そのものをささえる、秋、なのだ。夜空に仰ぐ星の光が、「私」の眼の捉えた対象物としての星なのかあるいは「私自身」の思いのなかに輝く星なのか、区別を付けることが難しい

のと同じことである。「私の最良の詩はこれまで知らなかったものにきちんとした、必然的なかたちを与えるものだ」という、詩人自身の言葉が思い出される。これは、私がすぐ前のパラグラフに引用した、ボンヌフォワ氏の言葉と響きあうものだろう。ジェニングスの「私」は世界認識の手段としての「私」であり、同時に認識された世界の表現としての「私」なのだ。この点で、告白詩人と称された一群の詩人達の、窮屈な世界に囚われた「私」とは違っている。

最後にジェニングスの略歴を紹介しておく。

エリザベス・ジェニングスは1926年にリンカーンシャーのボストンに生まれた。オックスフォード・ハイスクールから、オックスフォード大学セント・アンズ・カレッジに進み、英文学を学んだ。卒業後は広告のコピーライターや司書として働き、現在はフリーランスの作家である。彼女の言うところでは、独身のカトリック信者ということである。1953年に最初の詩集、*POEMS* を出版、これは ARTS COUNCIL PRIZE を受賞、1955年には、*A WAY OF LOOKING* 出版、SOMERSET MAUGHAM award 受賞、1958年、*A SENSE OF THE WORLD* 1961年、*SONG FOR A BIRTH OR A DEATH*. 同年 *EVERY CHANGING SHAPE* と題する、神秘的経験と詩作の関係を証す研究書を発表した。ジェニングスの詩の特長がこの辺りと関係するのかどうか、おおいに興味のあるところである。

イエイツ、エドウィン・ミュアー、ウオレス・スチーヴンス等を称賛しているというが、ジェニングスの独自の詩の世界にこれら先輩詩人達の影響は、必ずしも詳らかではない。

—注—

- (1) *ELIZABETH JENNINGS: COLLECTED POEMS*, Carcanet, New York, 1987
- (2) *ENGLISH POETRY 1918 — 60*, ed. by Kenneth Allott, A Penguin Book, 1986
- (3) "French Poetry and the Principle of Identity, translated by Stamelman, in *THE ACT AND THE PLACE OF POETRY*, by Yves Bonnefoy, ed. with an Introduction by John T. Naughton, Chicago, 1989
- (4) *ibid.* P. 119
- (5) *ibid.* P. 119